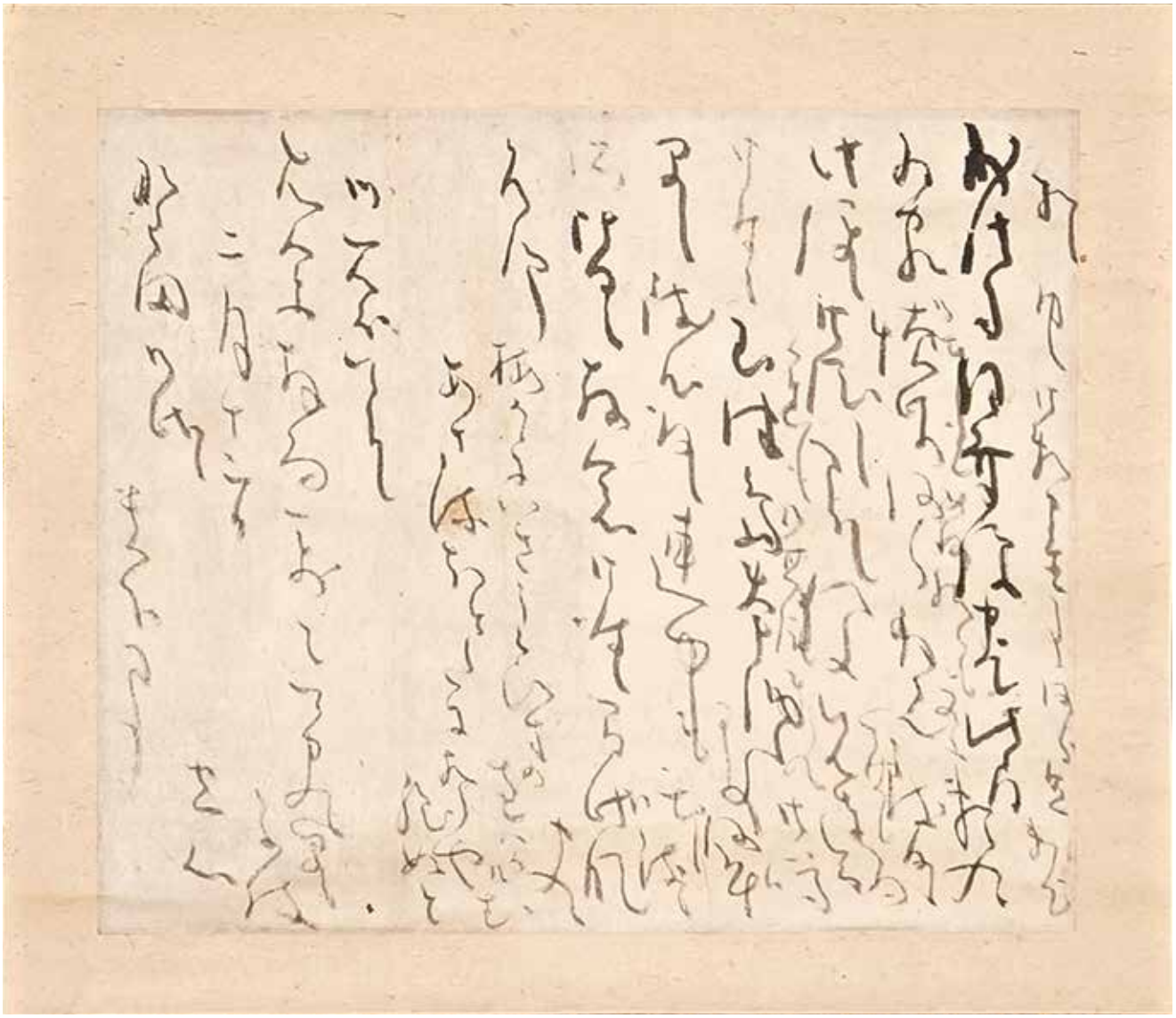
## 口絵

関西大学図書館蔵「契沖書状」　一軸・本紙26.2×31.1㎝



（翻刻）

猶内々御頼申候事何分宜頼上候
妙法寺任幸便申上候此間頼入候
御咄申上候如何様にも又々
為家懐紙（岱）何分拝見致度候
可仕候
此使へ御渡し可被下候猶又先達而御噂
くれ〳〵も御世話頼入申候事
御座候玉津島奉納之事何卒
早々致度存候連中も咄し致候
所皆々存念御座候間此段申入候
乍序
梅かえ（ゝカ）にいさうくひすのゑはかけむ
あさるほとたに聲や絶えぬと
御一笑可被下候
右余拝面萬々可申入候不備
二月十二日　空心
野田御氏へ
貴下用事

## 図版解説

（読解本文）

妙法寺任幸便申上候。此間頼入候為家懐紙、何分拝見致度候、此使へ御渡し可被下候。猶又先達而御噂御座候玉津島奉納之事、何卒早々致度存候連中も咄し致候所、皆々存念御座候間此段申入候。

乍序

　梅かえにいさうくひすのゑはかけむ

　あさるほとたに聲や絶えぬと

御一笑可被下候。

右余拝面萬々可申入候。不備

　二月十二日　　空心

野田御氏へ

　　貴下用事

（追書）

猶内々御頼申候事、何分宜頼上候。御咄申上候如、何様にも又々可仕候。くれ〴〵も御世話頼入申候事（？）

（解説）

本軸については、『契沖全集　第十六巻　書入二　遺文　書簡集』（１９７６、岩波書店）586頁に掲載されており、解説（848頁）によると「野田忠粛のところへ為家の懐紙を借りにやった時のもの」であり、確言はしていないが、「玉津島奉納のことが延宝集に見えるときのことだとすれば、延宝九年以前となるが」とされる。なお、【追記】に「この書簡は戦災で焼失したとのことである。」とある。偶然かもしれないが、２００５年に本学蔵となった「背面先生説」の軸も戦災で焼失したとされていた。

歌の第一句、契沖全集では「梅かゝ（えカ）」として「誤記であろう」とする。たしかに「ゝ」のようにみえるが、自筆とするならば「え」である可能性もある。歌の内容からは「え」でなければならず、「か（香）」は考えにくいからである。『漫吟集類題』にも「梅が枝に」となっている（334、『漫吟集』（龍公美本176）も同じ）。ただし、これが「ゝ」だとすると、誤記または誤写ということになり、本軸自体の問題として疑問が残る。

謝　辞

図版を提供いただいた関西大学図書館に厚く御礼申し上げます。

（乾　善彦・関西大学文学部教授）